

ベクトル空間

集合 V に対し、

$$\text{和} \quad a, b \in W \Rightarrow a + b \in W \quad (1)$$

$$\text{スカラー倍} \quad a \in W, c \in K \Rightarrow ca \in W \quad (2)$$

が定義されていて、次の 8 個の公理を満たすとき V を K 上のベクトル空間という。

公理

1. $\forall a, b \in V$ に対して $a + b = b + a$
2. $\forall a, b, c \in V$ に対して $(a + b) + c = a + (b + c)$
3. $\forall a \in V$ に対して $a + 0 = a$ となる元 0 がある
4. $\forall a \in V$ に対して $a + a' = 0$ となる V の元 a' がある
5. $\forall c \in K$ と $\forall a, b \in V$ に対して $c(a + b) = ca + cb$
6. $\forall c, c' \in K$ と $\forall a \in V$ に対して $(c + c')a = ca + c'a$
7. $\forall c, c' \in K$ と $\forall a \in V$ に対して $c(c'a) = (cc')a$
8. $\forall a \in V$ に対して $1a = a$

問題

ベクトル空間 V の部分集合 W が次の条件を満たすとする。

$$a, b \in W \Rightarrow a + b \in W \quad (3)$$

$$a \in W, c \in K \Rightarrow ca \in W \quad (4)$$

このとき、 W はベクトル空間の公理を満たすことを示せ。

.....

V はベクトル空間であるので公理をすべて満たしている。部分集合 $W \subset V$ の元について W の中で公理を満たしていることを確認する。

1. $\forall a, b \in W$ とする。

$a, b \in W \subset V$ であるので、 V の公理から $a + b = b + a$ が満たされる。

式 (3) より、 $a + b \in W$ であり、 $b + a \in W$ であるから、 W の中で $a + b = b + a$ である。

2. $\forall a, b, c \in W$ とする。

$a, b, c \in W \subset V$ より V 上で $(a + b) + c = a + (b + c)$ を満たす。

式 (3) より、 $a + b \in W$ であり、 $b + c \in W$ である。よって、 $(a + b) + c \in W$ であり、 $a + (b + c) \in W$ であるから W 上でも $(a + b) + c = a + (b + c)$ である。

3. $\forall \mathbf{a} \in W$ とする。

$\mathbf{a} \in W \subset V$ である為、 $\mathbf{a} + \mathbf{0} = \mathbf{a}$ となる元 $\mathbf{0}$ が V に存在する。

$0 \in K, \mathbf{a} \in V$ より $0\mathbf{a} = \mathbf{0} \in V$ だが $\mathbf{a} \in W$ であるので式 (4) より $0\mathbf{a} = \mathbf{0} \in W$ となる。

4. $\forall \mathbf{a} \in W$ とする。

$\mathbf{a} \in W \subset V$ である為、 $\mathbf{a} + \mathbf{a}' = \mathbf{0}$ となる元 \mathbf{a}' が V に存在する。

上の条件 3 より $0\mathbf{a} = \mathbf{0}$ である。 $0 \in K$ であるが、 K 上で $1 + \alpha = 0$ なる α が存在する。

また、次にある条件 6 $[(1 + \alpha)\mathbf{a} = 1\mathbf{a} + \alpha\mathbf{a}]$ と条件 8 $[1\mathbf{a} = \mathbf{a}]$ により W 上で次の式が成り立つ。

$$0 = 0\mathbf{a} = (1 + \alpha)\mathbf{a} = 1\mathbf{a} + \alpha\mathbf{a} = \mathbf{a} + \alpha\mathbf{a} \quad (5)$$

この $\alpha\mathbf{a} \in W$ は $\mathbf{a}' \in V$ と一致する。

5. $\forall c \in K, \forall \mathbf{a}, \mathbf{b} \in W$ とする。

$\mathbf{a}, \mathbf{b} \in W \subset V$ であるので、 V 上で $c(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = c\mathbf{a} + c\mathbf{b}$ である。

式 (3) より $\mathbf{a} + \mathbf{b} \in W$ であり、式 (4) より $c(\mathbf{a} + \mathbf{b}) \in W$ となる。

$c \in K, \mathbf{a}, \mathbf{b} \in W$ であるから式 (4) より $c\mathbf{a}, c\mathbf{b} \in W$ であり、式 (3) より $c\mathbf{a} + c\mathbf{b} \in W$ である。

つまり、 W 上でも $c(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = c\mathbf{a} + c\mathbf{b}$ である。

6. $\forall c, c' \in K, \forall \mathbf{a} \in W$ とする。

$\mathbf{a} \in W \subset V$ である為、 V 上で $(c + c')\mathbf{a} = c\mathbf{a} + c'\mathbf{a}$ である。

$c, c' \in K$ より $c + c' \in K$ である為、式 (4) より $(c + c')\mathbf{a} \in W$ である。

また、式 (4) より $c\mathbf{a}, c'\mathbf{a} \in W$ であり、式 (3) より $c\mathbf{a} + c'\mathbf{a} \in W$ である。

つまり、 W 上で $(c + c')\mathbf{a} = c\mathbf{a} + c'\mathbf{a}$ となる。

7. $\forall c, c' \in K, \forall \mathbf{a} \in W$ とする。

$\mathbf{a} \in W \subset V$ である為、 V 上で $c(c'\mathbf{a}) = (cc')\mathbf{a}$ であるが、式 (4) より $c'\mathbf{a} \in W$ であり $c(c'\mathbf{a}) \in W$ である。 $cc' \in K$ であるので $(cc')\mathbf{a} \in W$ である。つまり、 W の元としても $c(c'\mathbf{a}) = (cc')\mathbf{a}$ である。

8. $\forall \mathbf{a} \in W$ とする。

$\mathbf{a} \in W \subset V$ である為、 V 上で $1\mathbf{a} = \mathbf{a}$ であるが、 W の元としても $1\mathbf{a} = \mathbf{a}$ である。